
櫻の樹の下には

三須田直樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

櫻の樹の下には

【Nコード】

N8042Q

【作者名】

三須田直樹

【あらすじ】

異常者が語る世界と死体の話。

むろん、僕たちも将来的死体には変わりないのだけれどね、それに
したって、この世は死体で溢れていると思うんだ。

ある小説家がね、櫻の樹の下には死体が埋まっていると言うんだよ。
僕はね、それはまさしくその通りだと思うんだ。

桜はね、その死体から流れ出るとろりとした生命の素とも言わべき、
いや、死体そのものは生きちゃいないんだけどね。

まあ、なんというか、栄養分みたいなものだよね。

それをね、櫻はね、見えない土の中で根っこをタコの足のように絡
ませて、吸い取っているんだ。

いやはや、まさに生命だよ。それこそ、まさに生命だと思うんだ。

だけれどもね、僕はね、どうもそれだけではね、足りないと思うん
だ。

それというのもね、櫻以外にもね、僕はこの世は美しすぎると思う
んだ。僕と相対的に見れば、世界は実に美しいと思うんだ。

だからね、僕は櫻の樹の下だけではなくてね、

例えば、梅とか金木犀とか楓や椿の木の下なんかもね、あるんじ
ゃないかと思うんだよ。死体がね。

だから、この前ね、誰にも迷惑をかけないようにとね、夜の間にね、
確かめようと思ったんだ。

一人でね、夜が更けた頃に近所の公園に行ってね、スコップを持っ
て行ってね、掘り返してみたんだ。

あのときはね、本当に胸が高鳴ったよ。

だけど、僕の期待に反して、掘っても、掘ってもなかなか死体は出
てこないんだ。

僕はね、そんなはずはないと思って、そのままずっとね、ずっと細
くなった根っこしかないところまでね、木が倒れてしまうまで僕は
一生懸命掘ったんだ。

でもね、やはり死体は出てこなかった。

だけどね、僕がそのことに落胆しているうちにね、後ろから声がしたんだ。見るとね、そこには懐中電灯を持ったお巡りさんがいたんだ。

もちろんね、お巡りさんと言っても僕らと同じ将来的死体には変わりがないからね、僕はにこやかに対応しようとしたんだ。だけどね、お巡りさんの方は違ってた。

お巡りさんはね、みんなが寝静まった夜だというのにね、大きな声で僕を叱咤しはじめたんだ。

僕はね、慌ててね、お巡りさん静かにしてくださいよ。近所迷惑ですよってね、言ったんだ。

そしたらね、お巡りさんはね、余計に怒りだしてね、何が迷惑だ。公園の木を掘り返して、倒しちまうほうが迷惑だろうがと言った。

僕はね。分かってもらおうとしてね。いろいろとね。なぜ木を掘り返したのかを説明したんだけどね。

お巡りさんは全く僕の言うことを理解してくれなかった。

それどころかね、君は頭がおかしいんじゃないかと言ってきたんだ。僕はね、その言葉を聞いてね、ひどい徒労感に襲われたよ。

だけどね、その時にね、僕はあることを思いついたんだ。

今、掘った穴には死体が埋まっていなかった。これは自然な状態ではない。自然な状態に戻すには死体を埋めなければならない。

どうせ、僕らは今生きているだけでね、将来的死体には変わりがないのでからね、今すぐに死んでしまっても大して変りはないはずだとね。

そしてね、僕の目の前にはちょうど手頃なね、将来的死体がいんだ。まあ、少しうるさかったけどね。でもね、死体になってしまえばね、それも関係ないかなとそう思ったんだ。

だからね、僕はね、目の前のお巡りさんをね、持っていたスコップで殴りつけたんだ。

最初はね。ちょうどスコップのどがった部分が当たったのかね、お

巡りさんの耳からものすごい量のね、血が出始めたんだ。

お巡りさんはね、うっと言って、耳を押さえて、その場に座り込んでしまったんだ。

僕はね、その後でね、間髪をいれずにね、後頭部をスコップで殴った。何度も何度も念入りに殴った。

もしかしたらね、もうね、死んでしまったかもしれないと思ったのだけれどもね。

それでも、ちゃんと死体になってくれないと困るからね、うつぶせに倒れていたお巡りさんをね、仰向けにしてね、僕はスコップの尖った部分でお巡りさんの首のところをね、狙ってね、突き立てたんだ。

そしたらね、それはもうすごい量の血が出て、あれ？これは首が完全に体から離れてしまったかなと思ったんだ。

だけれどもね、かろうじて、ついていたんだ。

僕はね、これで、もう死んだだろうと思ってね、お巡りさんをさっき掘った穴に運んだ。ついでにそこら辺に飛び散った。血のついた土もうまく表面を削るようにして一緒に埋めた。

そしてその上に倒れた木を元通りにね、植えたんだ。

僕はね、その一連のすべての行動が終った時にね、すごいね、達成感を感じたんだ。これでようやく自然になったなあと思ったんだ。

僕は、その日はそのまま夜が明ける前に帰ったんだけどね、実を言うよね、似たようなことをそれから何度か繰り返したんだ。

その度にね、僕はね、今回もひと仕事終えたなと思ってね、達成感を感じたんだ。

この世はね、本当はね、死体だらけなんだよ。死体に満ち溢れてないよね、おかしいんだよ。

だってね、この世はね、本当にね、美しいんだもの。

死体はね、その美しさをね、生み出すためのねエネルギーなんだよ。僕たちは日々ね、動物や植物の死体を食べてね、生きているしね、石油とかね、そういう資源とかもね、やっぱりね。死体なんだよね。

僕らはね、もつとね、死体を認識するべきなんだよ。

認識すればね、自然と自分たちが将来的死体であることに気付いてね、早く死体になってね、世界の美しさにね、貢献したいなと思うはずなんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8042q/>

櫻の樹の下には

2011年10月6日22時55分発行